

牧師室から(2023.4.16)

昨日(13日)代々木で、アンドレイ・ガブリーロフというロシア人のピアノコンサートがあり、聴きに行った。ロシアの芸術家は、目下自国がウクライナとの戦争で他国から輦蹙を買っているのも、とても肩身の狭い思いをしていて、活動をしにくいのではないかと思ったので、応援するつもりであった。しかしその理由は二次的であり、実をいうと彼は、私が高校生の時に、最初に銀座に一人で聴きに行ったコンサートの演奏者であったので、それが懐かしく思い起されたのである。

しかし彼は、何年か前まで数年間に亘って演奏活動を休止して、その間自身で宗教や哲学を学んでいたというのである。当日の曲目はバッハ平均律第一巻であったが、彼は所謂ヴィルトゥオーソであると言えるが、私はまさか彼がバッハを弾くとは思ってもいなかった。おそらくその活動休止の期間に何か考えることがあったのであろう。演奏の合間に、何回か自分で自身の思いを語っていたが、曲と自分自身における神関係を含めた解釈であったようである。彼はそのように思索や霊性を深めたように思えたが、演奏は全体的にあまりに速く弾きすぎていると思った。難所も自信をもって余裕にあふれて弾いていたのが伝わってきた。平均律に限らないが、バッハの曲は、その曲の中で一音も省くことはできないので、むしろ一音ずつしっかりとそれが聞こえるように弾いたほうがよかったのではないかと思った。彼にとっては、職人的な技術の高さが誇りであり、それが演奏にも出てしまっていたのであろうと思った。

人は得てして自分の得意なこと、自信のある事、誇りが、自身の信仰や思索の深化を妨げることがあるのではないかと、改めて思った。

(鈴木淳一牧師)